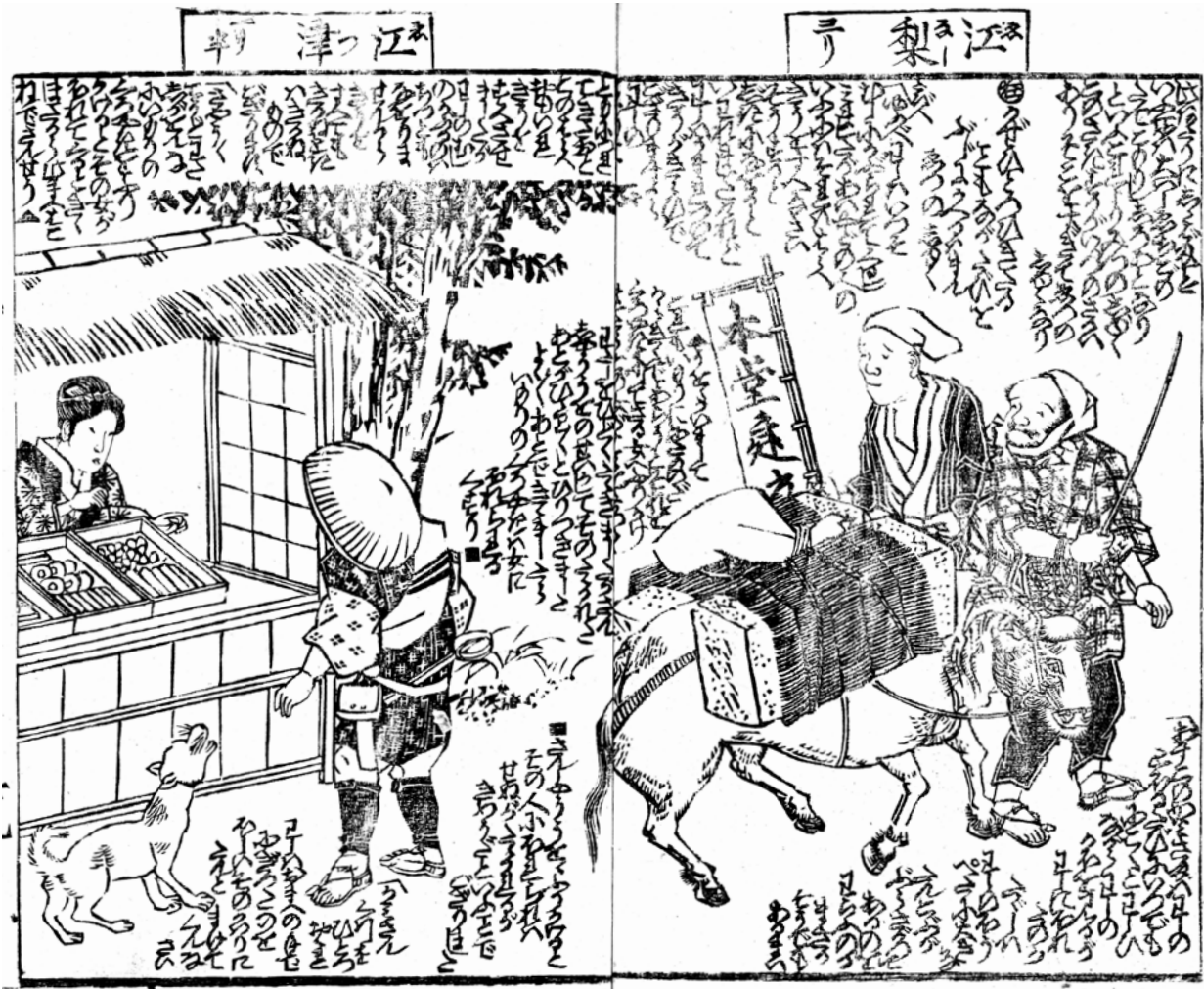


資料館だより

Vol.50 No.1 (通巻246号)

2025.6.25(年4回発行)



じっぺんしゃいっく 十辺舎一九著 『伊豆紀行 金草鞋二十二編』 江梨・江津 (江浦) 天保三辰春刊 (1832)

弥次郎兵衛・喜多八の『東海道中膝栗毛』で知られ、鳶屋重三郎の食客でもあった十辺舎一九の伊豆国の紀行本の一部です。各頁が版画とその隙間に挿入された名所の紹介や滑稽な話、狂歌などの文章で構成されています。

天保三年とありますが、一九は前年に亡くなっていますので、遺族による刊行だと考えられます。器用で文だけでなく絵も自ら書くこともあったそうです。

自序によればこれを著すに当たり不知案内であったが「…幸いに去夏、濃州中津川の和歌丸なる人、当国を歴遊し、駅々名所をあらましに書留たりし紀行を贈り越せしにより、取敢その俚を著したれど、例の酒客の筆さみ、究めて道路の順逆すべてのことの迭たるも多かるべし、それは識者の批判し給らんことを希ふものなり」とあり、自らの体験を基に著したものではないようです。

ここに掲載したのはその28・29丁目で、江梨・江津とあり、西浦江梨から静浦の江津（江浦）の宿までの名所などを紹介するものですが、どこまで事実を伝えているのかはわかりません。

右頁には「本堂建立」の幟を持つ僧侶に先導され、口取りに牽かれた役牛が描かれています。牛の背の両側には振り分け荷物として菰に巻かれた、建物の基礎らしい切り石が二本載せられています。左頁には菓子屋と店番の婦人と値引き交渉をしているような柄杓を腰に刺した旅人が描かれています。挿入文には「此の邊に志々濱（獅子浜）といふ処は、太守越後（大石越後守）の盾籠りし城跡なりといふ、是よりみつ（三津）の宿、この先駿河伊豆の国界あり、其処を過ぎて江津の宿なり」、次丁に「江津より直ぐに、東海道の沼津に至る。ここは名にし負う京洛への街道ならば往来頻繁く賑はひ、何ひとつ不自由のことなく、鰯て三島の宿に至り」とあります。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話

川口組の漁への願いと感謝・・・その1

漁に出ていても魚が捕れる時もあれば捕れない時もあります。また、海での漁は危険が伴うもので、一つ間違えば大けがに繋がります。海での漁には人智が及ばないものの働きがあるとして、漁師は大漁と漁の安全を願って神仏に祈ります。こうした漁に対する信仰は漁を行う漁師は勿論の事、漁師の出漁中に家を守る女性も熱心に神仏への祈りを捧げていました。

川口組が祀ってきた神仏にリュウジンサン（竜宮・竜神）があります。リュウジンサンは漁を授けてくれるものとして信仰の対象となっており、ご神体としてウミヘビが祀られます。川口組ではアルコールを浸したビンの中にウミヘビを入れて祀っていました。静浦地区では川口組のようにリュウジンサンのご神体としてウミヘビを祀る網組が他にもありました。川口組では毎月18日にリュウジンサンのオフクラ（祠）の前に奠座を敷き、組の女性が10人ほど集まって座り、オダイモク（題目…「南無妙法蓮華経」の七字）を唱えていました。また、年に一度、獅子浜にある日蓮宗本能寺のオショウニンサン（上人）を呼んで法要を営んでいました。また、正月三が日の朝は、オブッキ（折敷）に飯を盛った皿とゾウニ（雑煮）を載せた皿を載せてリュウジンサンのオフクラにお供えして手を合わせます。このゾウニは、煮た輪切りの大根を一番下、次に煮た里芋を載せ、一番上に薄切りにした角餅を載せたもので（写真1）、古くはこの上から鰹節をかけていました。リュウジンサンにお供えしたゾウニはすぐに下げて海岸に向かい、海に流して再び手を合わせます。ちなみにこの供物のゾウニは、ダイジンサン（産土や名のある神社に祀られている神を祀る神棚）やコウジンサン（荒神）など家で祀っている神へも供えられます。また、自分たちが食べるゾウニは、供物のゾウニとは違っており、煮た大根・里芋（供物のゾウニと同じもの）と薄切りにしていない焼いた切り餅をお椀に入れ、厚切りにしたソウダガツオの荒節で取っただしと味噌で仕立てた汁を注いだものです。※ゾウニの作り方は獅子浜集落内でも家によって差があります。

リュウジンサンと同様に川口組が祀ってきたものにオイナリサン（稲荷）があります。稲荷は漁業にご利益のある神様として漁師から信仰を集める神様です。オイナリサンもリュウジンサン同様にオフクラがあり、女性たちが月に1回オダイモクを唱えます。

女性たちは漁にご利益をもたらす祈禱師に対しても熱心に情報を収集していました。豊漁をもたらすという評判を聞いてはその祈禱師の元へ大漁祈願のために

通り、漁があればそのお礼のために訪れていました。川口組では沼津や清水（静岡市清水区）の祈禱師の所へ女性たちが出掛けて大漁祈願を行っていました。

満月を中心に一週間程度は、ツキヤスミとして川口組としての漁は休みとなります。この期間に1か月の川口組の収支を計算し、乗組員に給料が支払われます。また、乗組員の労をねぎらうために、オヤカタ（川口組の代表）の家の座敷で宴会が催されました。この時には、獅子浜集落内にある本能寺や曹洞宗楞嚴院といった寺院やシラヒゲサン（白髭神社）やシンメイサン（伊勢神明宮）やオアヅマサン（吾妻神社）といった神社へ漁のお礼として網組の女性が奉納金を納めに行っていました。

10月20日には、恵比寿講という特別な宴会がオヤカタの家で催されます。恵比寿もリュウジンサンと同様、漁をもたらす神として信仰されています。毎月の給料日に行われる宴会と変わりませんが、唯一違う点はオヤカタの家に祀られている恵比寿・大黒天を宴席に用意した机の上におろしてくる点です。恵比寿・大黒天をおろした机にはカケウオ（尾頭つきの2尾の魚を藁縄でつないだもの）とみかんや柿などのお供えをし、この二柱を前にして宴会を行います。

川口組は3家あるツモト（網組を設立した時に中心となって出資した家）が1年交代で順番にオヤカタを務めます。大晦日で1年が終わり、元日から新しいオヤカタに交代します。新しいオヤカタの元で始まる川口組の第一日目は、アミイワイ（網祝い）と称して、志のある人が川口組の網小屋に納めてある網に対して手を合わせます。川口さんからご寄贈頂いた『巾着規約書』には、「大正九年一月一日網祝ニテ結議ス」の文言に続いて組の規約が記載されており、この日は川口組の取り決めを行う日になっていました。正月2日には、暮れの内に作って床の間にお供えしていた大餅を船に祀ってあるフナガミサン（船霊）へ供え、塩・洗米・神酒をあげていました。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ

川口富美子氏 昭和21年生まれ 沼津市獅子浜在住）



写真1：正月三が日に神様へお供えするゾウニ
（写真提供：川口富美子氏）

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■大岡・金岡編 その2 生活の舞台①

大岡・金岡地区の「生活の舞台」として、地域の概観を見て行こう。最初に大地形として南流する黄瀬川が形成した扇状地の特徴から確認したい。

●黄瀬川扇状地の特異性 当該地域に対して、かつて研究者の間では「三島扇状地」のほか、「沼津・三島平野」とも、市街地の広がりから便宜的にそう呼ばれた。平野名は別として今日では命名に関して、全国的に扇状地の名称は流下する河川名で統一されており、今では「黄瀬川扇状地」としてすっかり定着した。

一般的な沖積扇状地の定義では、河川により形成された谷の出口を頂点（扇頂）とした、半円錐形の砂礫の堆積地形を指すことが定着している。また扇央部では平常時に砂礫の間に河水が浸透し、河川は伏流して「枯れ川」と成りやすい。さらに礫から成る扇状地では下流側に表面勾配が減じて、扇端部が比較的明瞭に認められる場合が多く、しばしば湧水が見られる。

これに対して黄瀬川扇状地でも形状的には扇形を成すが、その堆積環境からは典型的な扇状地とは言いがたい。扇状地堆積物が本州中央部を横断する、大地溝帯である「フォッサマグナ」の周辺部に特徴的な砂礫に特化せず、むしろ他の地域に共通する砂質・砂泥質の際立つ堆積環境をもたらした点にある。また富山・長野・山梨・静岡の各県に典型的な砂礫から構成された扇状地のほか、緩傾斜で規模の大きな「三角州性扇状地」（デルタファン）の事例にも該当しない。もちろん地形分類上の「三角州」にも当たらない。

黄瀬川扇状地の最上部の泥砂礫層は層相の変化に富む。火山砂礫や腐植土を挟むことが多いが、大部分は「泥流堆積物」である。一般的な砂礫から成る扇状地や緩傾斜の三角州性扇状地でもない。確かに一部では砂礫質の分布も見られるが、大半は砂質ないし泥質の地層が目立っている。富士川下流域で「加島平野」とも呼ばれる富士市松岡以南に広がる、富士川扇状地のような礫が目立つ典型的な三角州性扇状地とは大きく異なる。

縄文時代中期以降でも前面の駿河湾沿岸に継続的に埋積を進めた富士川に対して、香貫山以南で静岡山地以東の内湾（「狩野湾」）を埋積するのに要した期間は、地質時代を通して長期に渡る。一帯は今日の三島市南部から清水町域や沼津市大平地区に当たり、「田方平野」と呼ばれて来た平坦な広がりである。

●「御殿場泥流」の流下 地史的に見ると、約1万年前の三島溶岩流の流下後、約2900年前の縄文晩期に新富士火山の山体崩壊により「御殿場岩屑なだれ」が発生している。この山体崩壊では古富士火山末期の溶岩や火砕物から成る東側斜面が大きくえぐられ、箱根山

の西麓に乗り上げて停止し、やがて御殿場市東部の広大な平坦地を形成した。なお御殿場市街地から小山町周辺にかけては、山体崩壊に伴って形成された「流れ山」と呼ばれる50以上の小丘が今も分布する。その構成物から推定して、古富士火山の活動時期に発生した山体崩壊で崩れ残ったものがその後流下したことが推定されるほか、また多数の変質岩塊（流れ山）の存在から、地下の熱水変質帯の分布が関係している可能性が指摘されている。

この「御殿場岩屑なだれ堆積物」の一部は黄瀬川・酒匂川の源流部を塞ぎ止め、その後の決壊で発生した初期の下流域では10m～30mの厚さを示し、やがて火山泥流（土石流）は両方の河川に沿って急速に流下を重ねて繰り返す、駿河湾ならびに相模湾近くにまで達している。

これら「御殿場泥流」のうち黄瀬川に流れ込んだものは「黄瀬川扇状地堆積物」と呼ばれ、酒匂川の下流域（足柄平野）では「山北火山砂礫層」と呼ばれる。御殿場市神場・駒門付近より南側では、愛鷹山と箱根山の裾合谷で緩勾配となり、黄瀬川沿岸部では基底溶岩の上に「御殿場泥流」の二次的流下の堆積物が顕著に見られる。流域では劇的なインパクトで堆積環境の変化をもたらして埋積を重ねた結果、遺跡分布面で縄文時代をほとんど欠き、また弥生時代中期以前の遺跡も同様に認められない。

黄瀬川下流部では沼津市下香貫の藤井原付近、市街地西部では沼川沿いの大諏訪付近にまで広がった。狩野川沿いでは函南町肥田を南限に、清水町徳倉や沼津市大平では自然堤防下に埋積している可能性が大きい。



米軍空中写真 昭和22年9月撮影

皇室ゆかりの地探訪2 浜の稲荷

沼津御用邸西附属邸の通用門から左側に30mほどの松林中に稲荷社があります。現在は4本の朱色の新しい鳥居が並び、額には「松守稲荷」と表示されています。

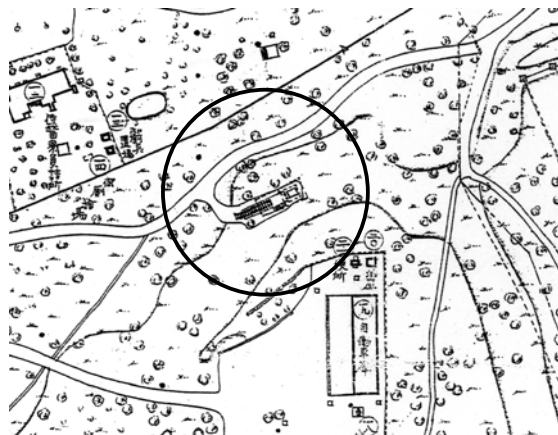
この稲荷社は、明治天皇と昭憲皇太后に仕えた山川三千子の回想録『女官』（講談社学術文庫2376）に「浜の稲荷の御利益」として記述されています。

それによれば、皇太后が御用邸滞在中のある日、真っ白の美しい髭を生やし、白い服をまとった老人が夢枕に立ち、「私は浜の稲荷と申しまして、御用邸のすぐそばにおります。御滞在中、火の用心やその他いろいろとお守り申し上げます。」と言って煙のように消えてしまった。目覚めた皇太后は、不思議に思い、供奉の女官に話し、属官に探させたところ、正門から左手で海岸に出る松林の奥に朽ち果てて屋根も傾いた稲荷の社があり、土地の人が昔から信心して祭ってきたが、小さな村で修理することもできず荒れるがままとっていた。

そこで昔と同じ大きさではあるが、新たに社を建てさせられて、さらに鳥居一基も建てさせられた。当時の供奉員一同も鳥居を奉納した。以来この地に御成になるたびに皇太后陛下が一基、供奉員一同から一基の鳥居を奉納するのが習わしようになった。松林の中に赤い鳥居が立ち並び小さいながらも立派な稲荷さんとなっていた。

毎年二月上旬の初午の日には桃郷の人々が集まってお稲荷さんのお祭りをを行い、御用邸にもお赤飯やお蕎麦を持ってきてくれるので、女官たちは面白がってその日を待っていたとあります。

社は御用邸滞在中の皇太后の守り神となっていたようです。大正11年に作成された「沼津御用邸總図」には、社の前に沢山の鳥居が立ち並ぶ様子が描かれています。



大正11年「沼津御用邸總図」に見える浜の稲荷



現在の浜の稲荷（松守稲荷社）

資料館からのお知らせ

資料集及び紀要の刊行について

資料集35「沼津の絵葉書Ⅱ」及び博物館紀要49を刊行しました。

資料集は沼津市内各所を写した風景写真の絵葉書を集成したものです。明治40年から大正7年までの間に発行されたもので、今回は市域の西部から中心市街地までが写されているものを収録しています。



職員の人事異動について

令和7年4月1日付けの定期人事異動により、館長芹澤一男が退任し、土屋剛彦が着任いたしました。

また、主幹（学芸員）鶴田晴徳が文化振興課主幹兼文化財調査係長に転出し、同文化財企画係主査（学芸員）上野尚美が転入しました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2025. 6. 25発行 Vol.50 No.1（通巻246号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp